

國學院大學學術情報リポジトリ

グローバル時代における日韓の近代新宗教の展開：
妙智會教団と圓佛教の事例を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 和珍, Lee, Hwajin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002465

令和二年三月二十一日
博士学位論文（宗教学）

「グローバル時代における日韓の近代新宗教の展開
—妙智會教団と圓佛教の事例を中心に—

國學院大學大学院
文学研究科 神道学専攻
李 和珍

「グローバル時代における日韓の近代新宗教の展開 —妙智會教団と圓佛教の事例を中心に—

李 和珍

論 文 要 旨

近代新宗教とグローバル化という視点

本論文は、情報化、グローバル化という大きな社会変化が生じている中で、近代に形成された新宗教がどのような問題に直面し、それに対応しようとしているかを、日本と韓国の教団から一つずつ取り上げ、比較しながら考察したものである。取り上げるのは日本の妙智會教団（以下、妙智會と記す）と韓国の圓佛教である。

妙智會と圓佛教は、いずれも創始者が 20 世紀前半に宗教家としての活動を始めた仏教系の教団である。教えや活動内容を見ていくと、生活の中での宗教実践を重視し、先祖供養を重要視するなど共通するところがいくつか見いだされる。近代化の中で人びとの宗教的なニーズに一定程度応える形で広がり、一定の社会的な位置を占めるにいたった両教団が、20 世紀末から急速に強まったグローバル化や情報化をはじめとする大きな社会変化の中で、どのような課題に直面し、どのように対応しているかに焦点を当てる。

近代以降に日本で形成された新しい教団に対しては、新宗教という言い方がもっとも包括的で、広く用いられている。この他に新興宗教という言い方もある。またとくに 1970 年代後半あたりから組織化された新宗教に対して新新宗教という言い方もなされた。ここでは基本的に両教団を近代新宗教という視点から扱う。その理由は、近代化で生じる社会変化に対応するような組織化、布教の方法などを展開させた大半の教団と、情報化やグローバル化が進行する中に生じた社会変化に対応するような組織化、布教の方法などを展開させた一部の教団とでは、いくつかの特徴的相違があるという、すでに指摘されている議論に基づいての研究だからである。

近代以降の日本、あるいは東アジアにおける社会変動は非常に大きく、その変化を細かく見ていくと、いくつかの段階が想定できる。また『新宗教事典』などには、それについての細かな区分例とそれに対応して新宗教の活動等にどのような違いが生じたかについての議論も紹介されている。それらを踏まえつつ、それぞれの教団において、新しい社会状況にどう対応しているかも比較する。また、社会状況だけでなく、日韓の文化的な違いが関係している点にも留意する。

グローバル化が何を指すかについては多くの議論があるが、本論文ではその定義について細かく議論することはしない。ただグローバル化が進行する中で、ボーダレス化という現象が起きるといって指摘に着目している。グローバル化の進行とともに、個々の宗教教団はこれまでと比べて非常な文化的多様性と直面することになる。信者の生活も多様化してくるし、教団がつながりを持つ宗教も多様化してくる。従来の対処法では対応できないような場面も生じる。

グローバル化の影響が近代に形成された教団の展開に具体的にどのように生じるかは、実際に調査し観察しなければ見えてこない。当然、教団ごとの違いは大きい。また背景となる文化が異なれば異なった問題も生じる。妙智會と圓佛教を比べる際には、同じグローバル化の時期における活動を比較したとしても、その背景として存在する社会や文化の特徴には重なる面と異なる面とがある。とくに宗教文化の面で言えば、日本と韓国では宗教分布に大きな違いがある。この点も考慮していく。

妙智會と圓佛教

グローバル化が進行する時期に両教団が行った具体的な活動を比較すると、いくつかの点に違いがあることを指摘できる。一つ顕著な例をあげれば、妙智會においては海外布教を目指す活動はほとんど見られず、また海外支部はない。だがユニセフという国際的機関を通して他の国における福祉活動、あるいは他の教団との連携・協働を推進しようとするところに特徴がある。一方、圓佛教は海外にいる韓国人を対象にする布教活動にも力を入れるようになり、米国をはじめ、日本を含めて 20 か国以上に支部が設置されている。韓国人への布教が中心とは言え、若干の韓国人以外の信者も得ている。さらに布教以外にそれぞれの地における医療、教育の活動を展開する姿勢を示している。

このような違いが生じた理由は、両教団が持っている理念や教えなどに求められる面もあるが、それぞれの教団が展開していく過程で置かれた社会的条件に求められる面もある。さらには、日本と韓国の宗教文化の違いに関わる面もある。両教団が形成され一定の信者を擁する規模になる過程で、どのような大きな社会的文化的背景の違いがあったかについては、日韓の新宗教に関するこれまでの研究に依拠して、最初に基本的な点を確認しておきたい。

日本の新宗教研究においては、近代新宗教が明治以降急速に数を増やし、また信者数も増えた背景として、近代新宗教が日本の近代化に適応する面があったことが指摘されている。つまり都市化、産業化、その過程での人口の流動化によって生じた社会変化が、近代新宗教の形成に作用したということである。江戸時代の神社や仏教宗派は、人々があまり移動しない社会を前提に安定的な活動をしていた。人口の約 8 割が農民であったとされるこの時代に、多くの人々は生まれた地で成長し死ぬという一生を送った。その地の神社、あるいは檀那寺との結びつきは強固で、世代を通して継承されるものであった。

しかしながら、近代化の過程で人々は生まれた土地を離れ、都市部へと移動する例が急速に増加した。ここでは神社及び檀那寺との結びつきはしだいに弱まり、都市部に住むようになった人々がそれまで地域社会で長く続いていた地縁・血縁にからんだ宗教的な絆で結びつくことは難しくなった。近代新宗教は、そうした都市部の人びと、また農業ではなく第二次産業や第三次産業に従事する人たちが宗教を通して結びつく場を新たに提供したとされる。

妙智會は靈友会からの分派であるが、靈友会は 1930 年に設立されており、そうした社会変化が全国的に生じている中で、まず東京を中心にして形成された。つまり、都市部から始まった宗教である。教えは先祖供養、法華經の重視など、伝統的な仏教宗派の在家運動と呼んでもいいような内容であるが、活動は仏教宗派とは大きく異なる。妙智會は靈友会の教えや活動形態は靈友会のものを大きく踏まえている。つまり教えは日蓮系の仏教宗

派のものを基盤にしているが、活動は霊友会の「導きの親」という観念を継承し、仏教宗派とは異なった組織原理を持っている。

従来の妙智會についての研究に基づけば、妙智會は仏教宗派の教えや儀礼を重んじつつも信者の獲得や、具体的実践においては独自の面を打ち出すことによって、戦後多くの信者を得るようになったと言える。

他方、韓国において圓佛教が形成される 20 世紀前半の社会的背景は大きく異なる。圓佛教の形成については第Ⅱ部で述べるが、その設立は日本が統治していた植民地時代である。当然に活動は自由ではなかった。また仏教宗派は李氏朝鮮時代に儒教が国教化されたこともあり、江戸時代に檀家制度が整った日本に比べると、組織的な活動という面で仏教教団の力はきわめて弱かった。日本統治時代に曹溪宗などの宗派が存在したものの、社会的な活動はあまりなされていなかった。

1911 年に朝鮮総督府は寺刹令を發布し、朝鮮仏教を日本の仏教宗派に似たような組織にしようとした。圓佛教が少太山によって創設された 1916 年はそうした時代であるため、活動への制約はきわめて大きかった。農作業を推奨する一方で精神運動的な性格を強く持って始められたのは、この社会的背景も影響していると考えられる。

戦前においては、社会運動的な側面は東学およびその系統の運動や教団の一部に見られ、弾圧されたものもあった。圓佛教は少なくとも形成期においては社会運動的な性格は弱かったが、活動には大きな制限があった。しかし、戦後の活動においては教育や福祉面における活動が顕著となった。

グローバル化時代の国際的展開への着目

より広く日本と韓国の宗教の国際的展開を考える際に、両国がこれまで置かれていた状況の大きな違いも確認しておきたい。日本の新宗教の国際的な活動については柳川啓一と森岡清美を代表者とするハワイ、カリフォルニアの日系人の宗教調査以後、研究が広がりを見せた。1990 年刊行の『新宗教事典』には新宗教の海外布教についての概要が記されている。それらに示されている日本の新宗教の国際的展開の特徴をおさえておく。

日本は戦前に朝鮮半島や台湾を植民地とし、またハワイや北米に移民を送ったため、新宗教が国外に出ていく足場があった。戦前は教派神道十三派があったが、そのうちの、黒住教、金光教、天理教、出雲大社教、神理教は国外でも教化活動を試みた。ほとんどは日本人、日系人を対象としたものであったが、金光教、天理教などは少数ながら現地の人も信者となった。

このように東アジアとハワイ、北米では、日本の宗教が海外に活動の場を広げていく上での事情がかなり異なるので、井上順孝は地域ごとの違いに着目して、東アジアは「国策依存タイプ」、ハワイ、北米は「移民依存タイプ」と区分している。そして戦後になると日本の敗戦によって国策依存タイプはなくなり、移民依存タイプの布教は弱まり、代わりに「無基盤タイプ」と呼ばれる布教が新宗教教団による布教活動の主流となったとする。

これに対し、韓国の場合は 1910 年に日本の植民地となり、宗教活動に多くの制限がかけられていたから、国外への布教活動は基本的にきわめて困難であった。1945 年 8 月 15 日は日本にとっては敗戦の日であるが、韓国にとって「光復節」の日である。以後、宗教活動の自由も大幅に保障されるようになった。しかし圓佛教の本格的な活動は、1950 年 6

月に始まり 53 年 7 月に休戦を迎える朝鮮戦争の後のことである。この時期韓国の宗教の国外への布教も可能になったわけであるが、国外布教を積極的に着手したのは主にキリスト教系の教団であった。圓佛教や民族宗教系の教団は、どちらかと言えば自国の伝統文化を見直そうとする傾向が強かった。それゆえ、圓佛教の国外布教が本格化するのは 1980 年代である。

以上を踏まえたうえで、グローバル化時代の両教団の活動に注目する理由を述べておきたい。

グローバル化時代には近代新宗教全体が大きな挑戦を受ける。新新宗教論が出たのも、新しい社会状況に応じた新しい教団の活動が目立つようになったのが一因と考えられる。しかし、グローバル化が進行する時代にも、布教活動をし、社会活動を展開している教団は、数で見れば圧倒的に近代新宗教である。社会において一定の位置を占めるようになった近代新宗教がグローバル化時代をどのように受け止め、対応していたかを見ていく研究はまだそれほど多くない。その一つの理由は伝統宗教を含め、戦前にできた教団が、戦後の社会変化に合わせて組織や活動形態などを変えていった部分がとらえにくいということがあると考えられる。教団にとっては、信者との関係上、柔軟な対応がやりにくい部分がある。すでに信者も二世信者、三世信者の時代となると、社会的に一定の安定性を得た部分を変えるには抵抗も多くなる。しかしながら、伝統宗教と比べて近代新宗教はそもそも社会移動が激しくなっていく時代に形成されたので、神社や仏教宗派と異なり、地域社会とのつながりの強さが活動を変化させにくい要因として働いているわけではない。教団自体の要因がより大きな比重を持つと考えられる。

日本においては、戦後に新日本宗教団体連合会（新宗連）が結成され、それによって社会活動を推進しようとする動きができた。近代新宗教の中にも国際的活動にも関心を深める教団が多くなった。近代新宗教は国際的な活動を展開しやすい要素をいくつか持っている。地域社会とのつながりが深いわけではないので、国外に支部を作ったり、外国の宗教団体とのつながりを持つことは比較的自由にできる。

社会運動も時代に対応して展開させやすい。分かりやすいのが、ジェンダー問題に関わる事柄である。近代新宗教においては、多くの場合、女性の教師や信者の活動が非常に大きな比重を占めている。妙智會は、祖先供養をする際、男女両系の総戒名を作るなど、男女に差別を設ける視点はあまりない。霊友会系の教団の特徴でもあるが、戦後の女性の地位の向上や社会活動の広まりに対応していると言える。神社の神職や仏教宗派の僧侶の場合、男女比にはかなりの差があるのに対し、妙智會では現在は女性教師の占める割合の方が多い。

韓国でも、近代化において多くの近代新宗教と呼べるものが形成された。韓国の研究者の間では、これらは新宗教あるいは民族宗教と呼ばれることが多い。韓国の近代新宗教の嚆矢は東学運動と言える。1897 年から 1910 年に至る大韓帝国時代の激変期に民族は危機を打開するために、精神的な面でもアイデンティティを守るために起こった民族宗教運動と位置づけられでいる。民族の独自性を守り、見出すことに集中して、国外に展開するという発想が芽生えにくい状況だったとされている。弾圧される中に、自らの文化を見直そうとする力が強く働いたと考えられる。

戦後は宗教活動が大幅に自由になり、キリスト教の教会やキリスト教系の団体が急増し

たが、民族宗教系の教団も仏教系の教団も活動が自由になった。しかし民族宗教系の大巡真理会、仏教系の圓佛教以外はそれほど教団の規模は大きくない。大巡真理会も圓佛教も大学を設立しており、社会的な活動も広げてきたが、韓国の近代新宗教においては、日本の新宗連のような組織は形成されなかった。グローバル化時代においても、それぞれの教団が独自に活動の展開を模索するという状況である。圓佛教は日本の教団と交流をするようになってきている。こうした状況の中での韓国の近代新宗教のグローバル化時代の展開を考える上で、圓佛教の活動の検討は非常に興味深い事例となる。

本論文の構成

本論文は、序章以下3部、そして終章が付される構成になっている。

まず、「序章」において本論文の目的を明確にした。20世紀末より顕著な現象となったグローバル化という世界的な社会変化が教団の活動に及ぼす影響を、論文の柱に据えながら、両教団が展開してきたさまざまな活動を視野に収めることを述べた。

「第I部 妙智會の形成とグローバル化時代の展開」は、妙智會の歴史と活動などの現況等を3つの章に分けて論じた。「第1章 妙智會に関する研究史 —宗教社会学的視点を中心に—」においては、妙智會について概要を示し、先行研究について考察した。妙智會は霊友会から1950年に分派し、初代会長の宮本ミツを中心に新たな組織を作った。ミツの没後は娘婿の宮本文靖会長、文靖の息子である恵司法嗣に継承された教団指導者の活動方針等については、教団資料を踏まえて概略を示した。また関連の統計資料も踏まえながら現代に至る教団の展開をまとめた。妙智會についての先行研究については、教団外のものと同教団内のものとを分けた。教団外の研究としては学術論文・紹介図書を紹介した。教団内の刊行物は教祖伝、定期刊行物などに分けて整理し、その内容も紹介した。

「第2章 グローバル化時代の到来と妙智會の展開 —機関紙・誌の分析を中心に—」においては、妙智會の会報である「妙智會」の内容から、妙智會がどのような人たちや団体とつながりを形成し、どのような活動を行っているかについて分析した。そして、国際活動の展開においては、1990年に設立された「ありがとう基金」が重要な機能を果たしているため、その活動について紹介し、会報と通して会員にどのような点を強調して広報してきたかを分析した。

「第3章 「ありがとうインターナショナル」の理念とその展開」においては、「ありがとう基金」が2012年に一般財団法人「ありがとうインターナショナル」となることで、国際活動が一段と広く展開され、国連機関やその他のNGOと連携していくようになった。妙智會のグローバル化時代の対応の特徴が見られる。

「第II部 圓佛教の形成とグローバル化時代への対応」においては、圓佛教は韓国ではいわゆる「4大宗教」に含まれていてよく知られた教団であるが、日本ではほとんど知られておらず日本人による研究は少ないという研究状況を踏まえ、圓佛教の歴史、組織、教理等についての概要などを3つの章に分けてまとめた。「第1章 圓佛教の現況と研究の動向 —宗教社会学的視点から—」においては、創設以来の圓佛教の歴史、組織の概要、基本的な教理、主たる儀式と修行、教団施設と関連機関、そして布教現況などを概括した上で、圓佛教についての先行研究史をまとめた。これらの歴史や活動の概要については、主に圓佛教の教団ホームページの情報と韓国語文献を参考にした。

「第 2 章 圓佛教の日本布教と現況」においては、圓佛教が初めて海外布教を行ったのは日本であるので、日本布教の歴史と現況をまとめた。圓佛教の宗教施設は「教堂（キョダン）」と呼ばれるが、日本の教堂に集まる信者はほとんどが韓国人あるいは韓国系の人たちである。面談調査や参与観察によって得られた結果に基づいて、日本人信者があまりいない理由について考察した。

「第 3 章 圓佛教の海外布教の日米比較 —「圓佛教新聞」の記事分析を中心に—」においては、機関紙「圓佛教新聞」に掲載された記事を分析して、圓佛教の海外布教について考察した。韓国外でもっとも多くの教堂及び関連施設が設立されている米国と日本の布教活動とを比較し、日本における教堂や日本人信者が少ない理由を考察した。

「第Ⅲ部 グローバル化時代における近代新宗教の展開の日韓比較」では、2000 年代後半に妙智會と圓佛教の信者に対して実施した大規模なアンケート調査の結果を分析した。「第 1 章 情報化時代における妙智會会員の意識 —アンケート調査の分析を中心に—」においては、2006 年～2007 年に妙智會の会員 2,486 人を対象に行ったアンケート調査の結果を分析した。会員の先祖供養に対する考えが世代間でどう異なるか、情報化時代の変化に会員の対応がどの程度意識化されているのかなどについて世代間の差に焦点を置いて考察した。

「第 2 章 情報化時代における圓佛教教徒の意識 —アンケート調査の分析を中心に—」においては、2008～2009 年に行った圓佛教の教徒 1,252 人を対象にしたアンケート調査の結果を分析した。教徒の信仰生活と教理、教団に対する考えを、世代間の差に焦点を置いて考察した。

「第 3 章 妙智會と圓佛教の意識調査の比較」においては、妙智會と圓佛教の信者を対象に行ったアンケート調査のうち、とくに先祖祭祀に関係する質問、及び情報化への対応に関する質問についての回答結果に焦点をあてて両教団を比較し、共通点と異なる点を明らかにし、その理由について考察した。

アンケート結果のうち、グローバル化や情報化の対応に関わる回答については、社会変化への意識の違いが世代によってどう異なるかを見るために、年齢別とのクロス集計を行って比較した。両教団の比較に際しては、アンケート調査、面談調査、及び機関紙・誌の分析結果も用いた。

「終章」では、妙智會と圓佛教のグローバル時代への対応の特徴をまとめた。妙智會も圓佛教も、教団の基礎が固まってくるのは、1950 年代から 60 年代にかけてであり、教えや活動のあり方もその時期の社会状況に大きな影響を受けた。また両教団における信者の高齢化が、グローバル化への対応をやや鈍くしている面に共通性がある。情報化に関しては圓佛教がインターネット上の情報を多様に発信するなど、妙智會だけでなく日本の他の近代新宗教に比べても比較的進んでいる面がある。これは韓国が 21 世紀になってすぐ、国家的に情報化を推進したことが影響していると言える。